地方創生と「道の駅」　レポート

熊本地震と九州の「道の駅」
～地域の防災拠点として果たした役割～

平成28年4月14日に熊本地方で発生したマグニチュード6.5、最大震度7の地震（前震）、その2日後に同地方で発生したマグニチュード7.3、最大震度7の地震（本震）により、各地に大きな被害が発生した。このとき、「道の駅」が地域の防災拠点としてどのような役割を果たしたのか、九州・沖縄「道の駅」連絡会九州・沖縄「道の駅」連絡会の矢幡弾事務局長代理にお話を伺い、現地での取り組みや今後の課題についてまとめた。

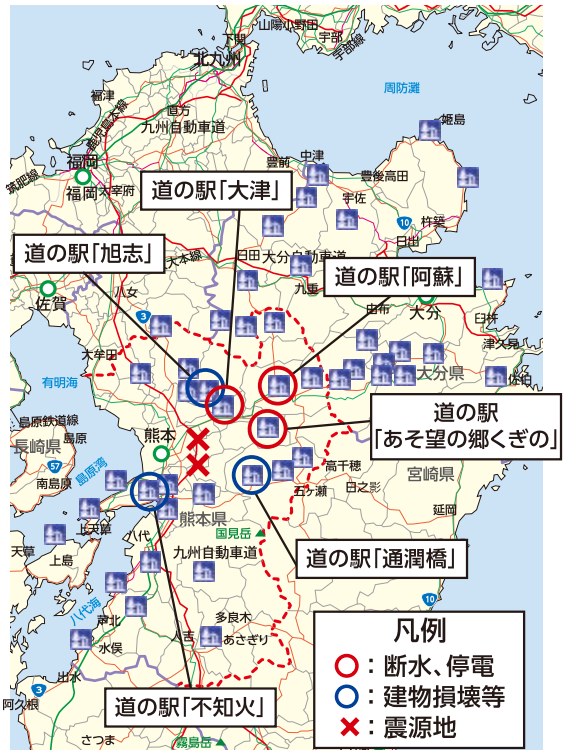
九州・沖縄「道の駅」連絡会
事務局長代理　矢幡 弾 氏

熊本地震における「道の駅」の被災状況

平成28年4月14日21時26分以降、熊本県から大分県にかけて相次いで発生した熊本地震では、強い揺れが何度も起きたことで家屋の倒壊や土砂崩れなどの地震災害に伴う被害が数多く発生した。道路は、南阿蘇村にある全長約200mの阿蘇大橋が土砂崩れで崩落したほか、生活道路の多くが寸断。高速道路をはじめ、国道、県道など多くの区間で通行不能となった。

熊本県内にある「道の駅」は、28駅中6駅が断水や停電、建物の破損など大きな被害を受けた。

・本震により大きな被害を受けた「道の駅」



・主な被災「道の駅」

駅　　名	主な被災内容（4/16本震後）
道の駅「大津」	・陳列商品の破損／断水（トイレ使用不可）
道の駅「阿蘇」	・陳列商品の破損／断水（トイレ使用不可）／停電
道の駅「あそ望の郷くぎの」	・陳列商品の破損／断水（湧水を使いトイレ使用可）／停電
道の駅「旭志」	・陳列商品の破損／天井の梁が落下
道の駅「不知火」	・陳列商品の破損／天井板の剥がれ
道の駅「通潤橋」	・陳列商品の破損／駐車場のひび割れ

道の駅「大津」店舗内の被害

九州・沖縄「道の駅」連絡会では、震災翌日から各駅と連絡を取り、安否確認と困っていることへの聞き取りを行った。そこでの要請を受け、断水のためトイレが使えない「大津」と「阿蘇」へは、国土交通省熊本河川国道事務所に簡易トイレを要請してすみやかに設置し、「不知火」へは緊急支援物資としてトイレットペーパーを発送する支援を実施した。

また、九州・沖縄「道の駅」のオリジナル商品である500mlペットボトル「茶の道の駅」134ケース（3,216本）

を提供し、「道の駅」を通じて被災者に配布した。こうした支援ができたのは、被災地周辺の道路は寸断されているが、緊急支援物資は優先的に運ばれていることや、被災自治体がまだ混乱している中で「道の駅」では支援物資の提供が可能だったことによる。

道の駅「阿蘇」に設置された簡易トイレ

道の駅「大津」に設置された簡易トイレ

緊急支援物資（500mlペットボトル「茶の道の駅」）

「道の駅」が果たした役割（1）<一時避難場所>

緊急避難対応として「道の駅」が果たした役割で第一に揚げられるのは、避難場所としての利用である。広い駐車場と敷地を有する「道の駅」は、多くの道路利用者や近隣住民などに一時的な避難場所として活用された。「あそ望の郷くぎの」では隣接するアウトドアショップより避難者にテントや寝袋等が貸し出され、テント設置数は約30張にも及び、多くの避難者の助けとなった。また、激しい余震が続いたため、広い駐車場とともに24時間トイレが使用できる「道の駅」は車中泊する場所としても利用された。

道の駅「あそ望の郷くぎの」に張った被災者用テント

4月18日早朝の道の駅「うき」駐車場

「道の駅」が果たした役割（2）<飲食料品・生活用品等の提供、炊き出し>

同じく重要な役割として、被災者への飲食料品や日用生活用品等の提供がある。多くの「道の駅」では、販売しているおにぎりやパン、弁当、飲料、食材などを提供したほか、ブルーシートや紙おむつ、生理用品、離乳食などを配布し、被災者の支援にあたった。また、水や食材が豊富にあった「道の駅」では素早く炊き出しを実施。こうした現場では「道の駅」駅長を筆頭に、テナント会社を含めた多くのスタッフのアイディアと行動力が大きな力となった。

道の駅「あそ望の郷くぎの」は4月16日の夕食から炊き出しを開始し、約7,400食を提供した

道の駅「大津」で行われた炊き出しと水の無料配布

「道の駅」が果たした役割（3）<前線・中継基地等の設置>

時間の経過に伴い「道の駅」が果たす役割は<緊急避難対応>から<災害復旧対応>に重点が置かれるようになる。道路が通行止めとなり、周辺から物資搬入ができなくなった南阿蘇村に対しては、「あそ望の郷くぎの」を拠点に自衛隊が炊き出しを行い、支援物資配布を実施するなど被災地救援の前線基地として活用。芝生広場はヘリコプターの離発着場ともなった。被災地に近い「きくすい」には緊急災害対策派遣隊（TEC-FORCE）の災害対策本部が設置された。また、複数の「道の駅」駐車場が被災地に向かう支援車両や緊急車両の中継基地として活用された。

支援車両、緊急車両の中継基地となった道の駅「小国」

被災地救援の前線基地・支援物資中継地点となった道の駅「あそ望の郷くぎの」

「道の駅」が果たした役割（4）<情報提供・発信>

さらに、被災後の通行可否状況を示した地図やチラシを「道の駅」にて作成し、コピーして配布するほか、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）にも掲載して情報提供を実施した。また、SNSや地域FMを活用して被災地域内外への情報発信・拡散を積極的に行った。FacebookやTwitterは情報掲載が容易であるとともに、スマートフォンなどで簡単に見ることができるため情報発信の手段として多く活用された。こうした取り組みは今回新たに「道の駅」が果たした役割であり、情報が迅速に伝達され、被災者が必要な支援を得やすくなった。

道の駅「阿蘇」にて手書きで示した通行状況マップ

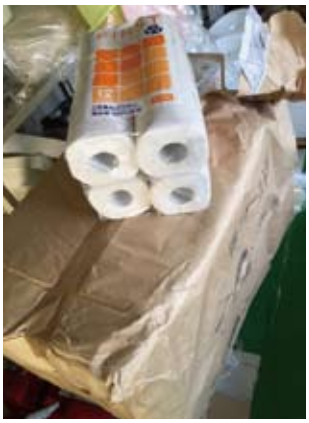
道の駅「小国」で行われた地域FMによる情報発信

道の駅「大津」のFacebook

道の駅「阿蘇」のFacebook

「道の駅」が果たした役割（5）
＜「道の駅」相互連携・支援＞

「道の駅」の相互連携による被災地や、被災地の「道の駅」に対する支援も実施された。断水や道路の寸断により流通がストップしたため被災地の「道の駅」では飲料水、トイレットペーパー、おむつ、生理用品等の商品が不足したが、連絡会をはじめ全国の「道の駅」より支援物資の提供があった。また、道路の通行状況の案内においては、別府方面の通行情報は道の駅「ゆふいん」で、福岡・熊本方面の通行情報は道の駅「小国」で案内する、といった形で相互連携が図られた。



連絡会から道の駅「不知火」に送られた支援物資の一部

さらに、被災後は通行車両や観光客の激減によりいくつかの「道の駅」は経営に大きな打撃を受け、存続が危ぶまれている。そこで九州・沖縄「道の駅」連絡会事務局では、熊本地震で打撃を受けた「道の駅」を支援したいという他県からの意向を汲み、「道の駅」相互の「支援―被支援マッチング」を実施。その結果、支援を受ける5駅に対し、九州やその他全国の「道の駅」49駅による支援（商品買い取り支援）が行われている。

こうした支援などにより、大きな被害を受けた「道の駅」は遅くても4月26日までにはすべて営業を再開し、地域の生活復興支援が行われている。

熊本地震において九州の「道の駅」は今までの教訓を生かして多くの役割を担い、確実に地域に貢献したといえる。「道の駅」が果たす役割が、時間とともに変化することも明らかになった。それと同時に、地域の防災拠点として有効に機能するために重要なポイントも浮かび上がってきた。その一つが、防災施設・設備だけでなく、災害時におけるソフト面の整備である。また、「道の駅」の地域防災計画等における位置づけの明確化、大規模災害時協定の締結、発災後3日間は自立的に活動できる体制の構築などが必要である。

さらに今後の課題として、「行政との連携強化」、「駅長、駅員等の自助努力に依存しない体制の構築」が揚げられる。また、震災後は多くの「道の駅」が売上げ低迷に直面し、従業員の解雇や営業の停止も視野に入れなければならない状況が見られる。「道の駅」の存続のためにも、「震災後の『道の駅』のゴーイングコンサーン（継続企業の前提）」も重要な課題である。

・近年の地震災害において「道の駅」が果たした役割

	中越地震	東日本大震災	熊本地震
避難場所の提供	●	●	●
トイレの提供		●	●
情報提供	●	●	●
物資の提供	●	●	●
炊き出し		●	●
支援基地等の設置	●	●	●
関係組織との連携		●	●
備　考	仮設住宅の提供		

・災害において「道の駅」に求められる役割

■災害発生後、「道の駅」に求められる役割は、時間の経過に伴い、

①緊急避難対応（避難場所の提供、飲食品の提供、炊き出し）
②災害復旧対応（前線・中継基地、支援物資の集積地）
③災害復興支援（地域の生活復興支援[地域振興施設の再開]）
へと変化

役割